人間存在における「老い」に関する哲学的考察

関根 正美

A philosophic inquiry into the aging of human beings

Masami Sekine

Abstract

Humans must resign themselves to the inevitable biological decline in their physical performance. How to deal with aging is a timeless problem for all humanity. Research adopting a natural scientific approach has focused on the problems associated with aging, especially in the realm of physical activity and the health of the elderly. On the other hand, deterioration of physical performance as a result of aging varies considerably among individuals. The present paper focuses on this problem by considering the meaning of physical aging from a philosophical viewpoint. Philosophy is based on philosophical anthropology and the existential viewpoint. This paper examines (1) Cicero's thoughts on aging, (2) the life-span developmental theory in an attempt to find a method for defining aging, and (3) the problem of freedom, in which the human body is regarded as an existential being. The main areas of discourse in this paper are as follows. 1. Cicero proposes a physiological rationale for aging, which is a natural process in humans. However, Milo focuses on the existential problem. 2. There are limitations to the life-span developmental theory. 3. The main limitation is a dimension of existence whereby our bodily freedom is lost as a direct result of aging, and the body exists as a subjective extension. Bodily freedom does not mean that our mind runs away from lost bodily ability. It means that our body as a subjective extension constitutes a new world. It is concluded that the problem of bodily freedom needs to be considered when addressing the issue of aging besides the field of natural science.

Key words : life long sport, body, existence, bodily freedom**(Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 50: 569-580, September, 2005)**

キーワード：生涯スポーツ，身体，実存，身体的
自由

I 序

本稿で問題にする「人間存在」とは、現実

きる人間のことである。それは生物学的存在である「ヒト」と文化的、理性的存在である「人間」の両方をあわせ持つ概念である。本稿における「人間存在」の概念は、研究対象としての「人間」や辞書的意味での「人間」とは区別されて、「現実生きる多面的且つ複雑な存在」を意味している。したがって、人間存在は現実生きる「われわれ自身」という主体的な意味を込めた存在であって、「人間一般」ないし「一般的な存在」ではない。本稿では「人間一般」ないし「一般的な存在」を人間としている。

さて、そのようなわれわれ人間存在は、たとえばどのように存在把握が試みられようとも、さしあたって生物学的に身体の衰えを必然的に引き受けなければならない存在である。それゆえ、われわれが生涯を生きるうえで身体上の老いとうどう向き合うかが重要な事柄となってくる。この問題を解決する一つの方向として、体育学では高齢者における身体運動の問題がこれまで研究されてきている（中谷ほか，2002；安永ほか，2002）。これらの研究は、QOLという生活の質に関する観点から加齢と身体能力の衰えの問題を取り上げた研究である。この加齢に伴う身体能力の衰えという点について、生涯スポーツを実践することにおいては健康の問題とりわけ疾病や障害、それと生理学的な能力の衰えという問題が常に存在している（勝田，2002）。身体能力の衰えは、科学的な数値によって示されるように人間が生涯を生きるうえで避けて通れない事実である。そのこともあってか、これまでの体育学における研究の中で、身体が問題になるのは主に自然科学的なアプローチでの加齢に伴う身体的健康の問題であり、高齢者の生理および心理面における健康を数値によって検証する研究であった（青木，1994，2000；衣笠ほか，1995；重松ほか，2000）。

これら自然科学的なアプローチによって人間の生理・心理面に焦点を当てた研究は、加齢に伴う身体の衰えという問題に対して数値を示すことで、具体的かつ明確な解答を与えてきたといえる。つまりそれらは科学の性格上、人間に関してあらゆる問題を解決しうるものではないものの、当該

の問題を解決するための確実な方法を示してきたという点に意義が認められると言える^{注1)}。

しかしながらその一方で、人間存在には「人間的特殊性」と呼ばれうる側面がある^{注2)}。人間存在は科学的研究から得られた知見のみではとらえきれないものとの関わりの中で自らの生存の意味を問い、生の充実という希望を携えつつ生きる特殊な存在である^{注3)}。自らの生の意味を問う特殊存在としての人間は、その歴史を通じて様々な文化を生み出してきた^{注4)}。スポーツもまた、人間が生み出した文化の領域に位置づけることができる。たとえばGrupe（1987，p. 9）は次のように言っている。「スポーツと文化の関係は、ここ数十年前まではほとんど相入れないものだった。——中略——このような関係はその間に変化していった。文化とは何か、あるいは文化をどのように捉えるかについての認識が単に変化したばかりでなく、スポーツもまたその間に明らかに文化の一部として捉えられるようになったのである」。このように、Grupeはスポーツが社会的に文化として認知されてきたことを指摘している。さらに佐藤（1991，1998）は、スポーツは決して単純な身体運動現象に留まるものではないとして、スポーツが独自の文化を構成していると指摘している^{注5)}。

要するに、スポーツは文化であり人間的な活動の一形式と考えられている^{注6)}。スポーツが人間の生み出した文化であるということは、スポーツという行為そのものあるいはそれに関わる人間存在の身体的行為が純粹に物理的ないし生物的な存在として科学の対象とされる次元を越えていることを意味する。このことが、スポーツとそれに関わる人間存在における身体の問題に対して人文・社会科学的な立場から考察することを要請するといえるであろう。単に日常生活の延長ではなく文化としてのスポーツに特殊存在としての人間が関わるという次元で考えると、加齢に伴う身体の衰えは科学によって克服できない次元を有するのではないか。この根本的疑問が本稿の原動力である。そしてこの種の疑問に答えるには、哲学的な考察が必要であると思われる。

したがって、本稿の目的は人間存在が身体的に

老いることの意味を哲学的に考察することである。具体的には、身体的「老い」の克服に関して科学では解決しきれない領域を明らかにすることと、生涯スポーツ実践における希望の原理を素朴な形で示すことが、本稿の検討課題になる。その際、人間の生き方に関わる問題として身体の衰えに考察の焦点が当てられることになる。

以上の目的および具体的な検討課題にアプローチするために、本稿では人間存在の生における「老い」の問題を身体の衰えに焦点を当てながら、人間学 (anthropology) および実存 (existence) の観点から考えてみたい。本稿における「人間学」は厳密に言えば、「自然人類学 (natural anthropology)」や「文化人類学 (cultural anthropology)」とは区別され、「植物ならびに動物に対する関係における人間の本质および人間の形而上学的特権地位」(Scheler, 1949, S. 12) を意味する「哲学的人間学 (philosophical anthropology)」を意味している (金子, 1995)。本稿における「実存」とは、人間学によって把握される特殊存在としての人間ではなく、個別存在としての人間である。したがって、両者は同じように人間の内面を問題にするとしても、実存の世界は人間学の間主観よりも主観的である。

II キケロにおける加齢と身体 —ミロンの嘆き

人間存在における加齢と身体の問題を科学に還元できない次元で考察するにあたっては、人間の内面に関わる問題を構造化する必要がある。そこで、人間の老いに関する著作を著しているキケロの作品を一つのトルソとして、「老い」の中に潜む人間存在の問題を構造的に取り出しつつ考察を進めてゆきたい。ここでなぜキケロを取り上げるのかといえば、それが古典として現代にいたるまでその思想が生きていると思われることと、「老い」を語る老人と若者という異なる立場からの言説が「老い」の問題を構造的に語っていると考えられるからである。さらに老いを人生との関連で描写するキケロの思想には、人間存在であることの原点が込められていると考えられる^{注7)}。

さて、キケロは *Cato Maior De Senectute* (邦訳名『老年について』) の中で「老い」の問題を論じている。そもそもキケロはなぜ「老年」を主題として論じようとしたのか。それは本稿における問いの根本をなす「老年という重荷」に関わる問題が彼の中にあったからである。キケロのこの書は親友であるアッティクス (Attice, Atticus) に献じるために書かれたのだが、冒頭の部分で彼は次のように言っている。「今、私はあなたに献じるために老年についていささか書き記すことを決意した。というのも、緊急に迫っているというほどではないものの、確かに近づきつつある老年という重荷は、私とあなたに共通のものであり、あなたも私もこの重荷から軽くなりたいと願っているからに他ならない」(Cicero, 1996, pp. 10-11)^{注8)}。キケロが老年を主題とした背景には、そもそも彼の老年への恐れがあったからだといえる。ここで言われる老年への恐れとは、老いてしまうことによって生じる老人の欠点に対して抱かれているのだが、その中でも本稿における考察の中心をなす身体の問題に焦点をあてて考察を進めてみたい。その身体に関する問題とは、具体的には体力の問題である^{注9)}。体力の問題は、老年の持つ欠点に関する議論の内、第二の論点として扱われている。ここでキケロはミロンへの批判を通して老年における体力の問題を論じている。

年老いたミロンは競技場の運動選手の姿を見て、その選手と自分の衰えてしまったからだを比較して嘆く。キケロはミロンの嘆きに対して痛烈に批判する。「在るものを使う、そして何をするにしても体力に応じて行うのがよいのだ。だから、クロトーンの人ミロンの言葉ほど情けないものがあるだろうか。彼は、それは既に年を取ってからのことだが、競技場で競技者たちがトレーニングしているのを見て、自分の腕をまじまじと見つめ、涙を流しながら、『ああ、私の腕は死んでしまっている』と言ったそうである。愚か者め、腕というより君自身が死んでいるのだ。なぜなら、君が名声を得たのは君という人間によってではなく、肺と腕の野獣的な強さによってなのだから」(Cicero, 1996, pp. 36-37)。自分の身体の衰え

を嘆くミロンの態度に批判を加えた後に、キケロは老年における体力の問題を—それは当然老化に伴う体力の衰えに関わる問題であるが—論じる。キケロがここで主張する老年における体力の問題とは、それを端的に表現するならば体力不要論である。

キケロは老人に若者の体力は不必要であることを次のように言う。「人生の行程は定まっている。自然の道は一本で折り返しが無い。そして人生の各ステージにはその時にふさわしい性質が与えられている。少年のひ弱さ、若者の覇気、成人期の重厚さ、老年期の円熟、いずれもそのときに取り入れなければならない自然の恵みのようなものである」。(Cicero, 1996, pp. 42-43) このようにキケロは各ライフステージに応じた生き方が人間にはあるのだという。彼は体力不要論を裏付けるために、老いてからの自分の生活を知的、精神的活動に従事させているとして次のように語る。「これは知力の鍛錬であり、精神の鍛錬なのである。こういうことに汗を流し苦労している間は、体力の衰えなどは全く感じないものである」(Cicero, 1996, pp. 46-47)。ここでキケロが老年における自己の体力不在という問題を回避するために提起している方法原理は、生活様式の転換とそれに伴う内面の変化である。

けれどもここで問題になるのは、体力の衰えが生物学的存在である人間にとって自然である一方で、生活様式の転換とそれに伴う内面の変化は自然の産物ではない点である。体力の衰えという生物学的現象は—もちろん個人差は認められるにしても—われわれ人間存在に誰にでも等しく現れる^{注10)}。それに対し、内面の変化は生物学的現象ではなく人間の精神に根ざしている。この両者の根本的な相違が老年における体力の衰えに存在し、一人の人間の中に加齢に伴う身体の衰えという問題を引き起こすものと思われる。ミロンの嘆きがそのことを物語っている。

このことはキケロの記述からもうかがえる。彼は体力不要論を展開し老年期を賛美する。けれどもなお、老年期を巡る実存の内実は彼の中で揺れているように思われる。「ラエリウスとスキープ

オーよ、老年 (senectus, old age) には立ち向かわねばならない。その欠点はたゆまず補わねばならない。病に対するごとく老いと戦わなければならない」(Cicero, 1996, pp. 44-45)。キケロにとってもまた、老いはそこで調和が実現する安寧の場ではない。それはむしろ克服すべき戦いの対象でさえあるかのようである。

しかしここで一つの疑問が生ずる。何故にキケロは揺れるのだろうか。いったい何がキケロの内面に体力不要論をもってしても解消され得ない不安を引き起こすのであろうか。ミロンの嘆きの原因は現在の自己における体力(身体能力)不在に起因している。存在しないということの不安や悲しみは本来存在して欲しいという欲求に根ざしている。「明らかに、非存在は、人間的期待の範囲内にあらわれる」^{注11)} (Sartre, 1943, p. 46) のである。ここにもまた、人間にとって固有の問いが表れている。キケロによって表現されたミロンの嘆きは、人間的期待とその成就不可能の間で起こっているのである。

III 身体の衰えには実存の問題が存在する(1) —生涯発達理論：両行モデルの限界

キケロが老いの問題を論じる際に試みた方法原理は、生涯にわたって人間の内的充実の可能性を主張しているという点で、突き詰めて言うならば現代の生涯発達理論に他ならないのではないか。キケロは体力不要論の観点から老いることの克服を言おうとしたけれども、ある種の限界に突き当たってしまったといえる。

では、現代の生涯発達理論はどうであろうか。生涯スポーツ論における基礎理論となっているのは、主に心理学の領域で展開されている生涯発達理論である。なかでも生涯発達心理学と呼ばれる領域において、人間の心理的側面からの生涯にわたる発達可能性が論じられている^{注12)}。生涯にわたってスポーツを行うことの障壁になると考えられる身体の高齢化に対して、それは有効に作用するのだろうか。キケロによって提出された老いの問題を発達可能性という次元に置き換えて、どの程度それによって克服可能であるのかが次に検証さ

れなければならない。さらに、加齢に伴う体力（身体能力）の衰えが人間存在の中で本能の次元を越えて、特殊存在としての次元で受け止められるべきものであるとするならば、その次元は何であるかが考察されねばならない。

人間の発達可能性は発達心理学者によっていくつかの立場から述べられているわけだが、人生の後半におけるスポーツの意義を見出すための基礎となるモデルについて、金崎（2000, p. 63）は「両行モデル」に注目する。彼は次のように述べている。「これからの生涯スポーツ論は、生涯という長い時間軸で多次元的な発達があると捉え、人とスポーツとのかかわりの変化やそのプロセスに注目すべきであろう。その意味で、両行モデルは今後の生涯スポーツ研究において大いに参考になるモデルといえよう」。その両行モデルの特徴は、「両行モデルからは、喪失そのものをポジティブに眺める『発達における喪失の意義』という新しい観点が導かれる」（やまだ, 1995）という点にある。いうなれば、両行モデルとは発達における喪失の意義を説くモデルである^{注13)}。

両行モデルにおける喪失の意義を体力（身体能力）に関連づけていえば、加齢に伴う身体能力の低下は人間にとってマイナスではなく、むしろ意義のあることになる。たとえばそれは、身体能力の低下がスポーツとの関わり方を変える契機になるという点に見られるという。金崎（2000, p. 62）はそのことを次のような例で述べる。「身体能力の低下によって、かえってスポーツとのかかわり方がより安全で健康的になったり、人との社交を重視するようになったり、また、運動量が少なく技術や体力もそれほど必要としない軽スポーツとかニュースポーツといわれる種目を始めることも可能である」。それにしたがえば、人間は体力（身体能力）の低下を契機として、安全や健康を重視したり人との社交を重視したりするようになるということに意義を見出すといえる。

心理学に理論的根拠を置く生涯発達理論が体力（身体能力）の衰えに意義を見出すために採る方法は、端的に言えば意味の転換である^{注14)}。意味の転換は、先に考察した生涯発達理論の「両行モ

デル」が「老い」に意義を見出すために採った戦略である。意味の転換とは、変化、変容を自らが認知することである。その際の変化、変容の基軸は常に現在の自己である。すなわち、「変化・変容を記すには、ある定点をどこかに設定し、その定点からの偏差を測ることによってしかなし得ないように、人間の成長発達も、現在の時点とその現在から照射した過去や未来の時点との偏差でしか語ることができない」（鈴木, 1997）のである。たとえば、意味の転換が理想的になされた場合を想定するならば、それは過去とは異なる現在の状態を、過去との比較において認めることのできる状態になるであろう。

現在を基軸にした意味の転換に身体の側から問題を重ね合わせると、ここでもまたキケロにおけるミロンの態度に行き着いてしまう。自己の身体の衰えを嘆くミロンの態度は、現在における身体の状態に過去の体力の産物である自己有能感を重ねてしまっている。この場合、身体の状態が変化したのみで、内面の変化・変容がなされていない。要するに、意味の転換という方法はミロンの中で「老い」の意義を見出すまでの有効性を持ち得なかったものであり、また意味の転換が成功していないことが彼の内面的な矛盾を引き起こしているのである。「老い」の直接的な対象である身体を不問にしたままでは、依然として「老い」という人間存在の苦悩を取り去ることはできない。ここに意味の転換という方法そのものの限界がある。自然科学が対象としての身体に局地的に関わるのとは逆の態度に、つまり、意味の転換という内面を問題にしつつも身体を不問にするという態度に、生涯発達理論の限界を指摘することができるものと思われる。

このように考えてくると、生涯発達心理学としての両行モデルには、生物学的存在としての自己拘束性と特殊存在としての自己の内面が矛盾を引き起こすことへの解決という点で限界があると言えるであろう。われわれ人間存在は、体力（身体能力）の変化に応じて機械的に生きる意味を変えることのできるような単純存在ではない。いわば二重存在としての人間存在における身体的「老い」

の問題は、自然科学でもなく心理学でもなく体育学における人間の問題として考えられるべきである。これは、これまでの考察から言える本稿の立場である。しかしながら、身体的老いの問題が生きる意味という実存の問題の存在を示唆する限りにおいて、人間学的考察よりもより具体的な人間の問いかけである実存論的考察が必要になると思われる。それは、動物とは異なる文化を持つ特殊存在としての人間学的考察から、いかに生きべきかを問う実存論的考察への展開を意味している。よって、われわれの考察も実存論的な問いへと進むことになる。

IV 身体の衰えには実存の問題が存在する (2) 一身体の自由

キケロの『老年について』における登場人物の一人である大カトーは、老年の欠点とされる体力の問題に関する議論の中で、「在るものを使う、そして何をするにしても体力に応じて行うのがよいのだ」(Cicero, 1996, p. 36-37)と言う。この立場は現代の生理学をはじめとする自然科学の立場に近いように思われる。フィットネスクラブや健康増進講座などで身体的な健康の維持を目的として行われる運動は、体力測定によって得られた数値に応じてプログラムが組まれている。実験をその知見獲得のための方法とする自然科学的立場から得られたスポーツ科学の知見は、人間の限界を明確な数値でもって表す。科学的知見は、それでもって人間が世界における自己の位置を知るのには有効である^{注15)}。ただしその先の解釈までは与えない(もしそれを許してしまうなら、それはもはや客観的ではないであろう)。科学的知見によって示された自己の位置は、一見すると新たな自己の獲得のようにも思える。

だが、たとえ明確な限界点が新たな自己の獲得であるとしても、人間存在に関してここでは何かが忘却されてはいないだろうか。キケロによって描かれた体力(身体能力)の喪失に対するミロンの悲観的態度は、過去との比較という時間の流れの中で生じている。人間存在における身体的「老い」の問題が、現在という一点だけでなく過去か

ら現在という時の流れを地盤にしてとらえられるものだとすれば、時の経過とともに何かやがて失われるのではないだろうか。自然科学的な世界の先にあるフィールドおよび特殊存在としての人間一般というレベルの先にある、「老い」という失われしものへの視線が注がれるべきフィールドとは何だろうか。

ボーボワール(1972)は「老い」に関する問題のフィールドを実存的規模でとらえて次のように言う。「あらゆる人間的状況と同様、老いは実存的規模をもっている、すなわち、老いは人間の時間に対する関係を変え、したがって世界に対する、そして彼自身の歴史に対する彼の関係をも変える」。ボーボワールが指摘する「老い」の時間性、歴史性は、身体においても「獲得」という面のみならず常に一人の人間の中に過去との対比において「喪失」という面が存在することを示唆している。Sartreが「非存在(non-être)」(Sartre, 1943, p. 47)について語るように、人間存在における加齢に伴う身体能力の衰えはさしあたって自由性の喪失であるといえる。

身体能力の衰えがなぜ自由性の喪失なのか。英語の語法に従えば、一般に自由には「解放」を意味するlibertyと「内なる自由」を意味するfreedomがある(山口, 2003)とされる。ここで喪失される対象としての自由は前者の意味での自由である。すなわち、自由性の喪失とは、解放性を失うという意味で一種の束縛である。

この自由性の喪失に関しては、加齢に伴うという点が重要である。自由性の喪失はSartre思想で言明される思弁的次元の事態でのみ起こりうるのではなく、「主体の延長として」加齢に伴って生理・解剖学的な実体的次元でも起こることが、精神病理学者によって指摘されている(中井, 1995, p. 185)^{注16)}。身体は生物学的存在性を保持しつつも、いわば「主体の延長」として内面性と分かち難く結びついている。老いによって自己に到来する不自由さは決して幻想ではなく、生理・解剖学的な実体的次元で現実の事態として身体に経験される。ここでかりに自己が自らの身体における変化、変容を確認するならば、老いによって

現実の身体にもたらされている不自由性は過去へのノスタルジーを喚起し、未来の自己が本来持ちうる可能性を奪うであろう。ここに加齢に伴う身体能力（体力）の衰えが人間存在の中で実存の問題として現れてくる。この場合の（本稿における）「実存」とは、人間学によって把握される特殊存在よりもより自己の内面に関わり、他者と置き換えることが不可能である自己を問題にする態度である^{注17)}。

「老い」によって自由が問題とされるこのような身体の位相は、もはや「このわたしから切り離され、無人称化し、さらには物体化してわたしたちの前に対象として置かれているような身体」（荻野，1988）ではない。「老い」とともに衰えたわれわれの身体は、実存的身体としてわれわれ自身の生と分かち難く結びついている^{注18)}。要するに、われわれの身体には過去の歴史とともに練り上げられた実存の世界が存在する。

そのことを「幻影肢（jambe fantome）」という概念で明らかにしたのはMerleau-Pontyである^{注19)}。幻影肢で強調されるべきは、「腕の幻影肢をもつとは、その腕だけに可能な一切の諸行動に今までどおり開かれてあろうとすることであり、切断以前にもっていた実践的領野をいまもなお保持する」（Merleau-Ponty, 1945, p. 97）という点である。ここにMerleau-Pontyは世界に自己を参加させる契機としての「世界内存在の媒質（le vehicule de l'être au monde）」（Merleau-Ponty, 1945, p. 97）としての身体を見出している。人間存在には世界に向けて自己を参加させようとする実存の運動がある。Merleau-Pontyの文脈においても身体は自然科学の対象であることを越えて「主体の延長として」存在している。

では、「主体の延長としての身体」という人間理解から、われわれはいかにして体力（身体能力）の衰えを克服し、身体的自由を獲得することができるのだろうか。ここで筆者が問題にしたいのは、先に述べた二種類の自由の内、後者の意味での「内なる自由」である。「内なる自由」を基本的な意味とする身体的自由とは、Sartreが語る「非存在（non-être）」が「存在（être）」であろうとす

る身体的存在としての「自由な投企（le projet libre）」（Sartre, 1943, p. 559）である。それはつまり、「他者、道具、または外界との関係、主客の関係をたえず更新しつつ、したがって身体への視線もたえず転換して、関係性をとらえなおす」（山口，2003）ことである。したがって身体的自由とは、喪失した自由すなわち身体的不自由さから解放される意味での逃走ではなく、新たな実践的領野を再構成する能動性のことである。それは、身体を物体としてとらえることとも、身体を精神と同一視するととらえ方とも異なる身体存在の次元である。Merleau-Pontyが語る主体の延長としての身体が自己として世界に参加するということは、そのつど構成された世界を現実として生きることを意味している。たとえば、そのように構成された世界に生きているのであれば、身体能力（体力）の衰えをノスタルジーとして本来の自己を過去に求め嘆くことはないであろう。ただし、ここで言明可能なことは、世界構成ないし世界参加への方法論ではなく、それらを構造的に理解し、世界構成という事態の存在を、「主体の延長としての身体は新たな世界構成の基点として作用する」ものとして確認することまでである。身体的自由は様々な方法で具体化可能であろうが、「主体の延長としての身体」は機能概念であり、身体的自由を獲得するための一つの可能性として理解されるべきである。

生涯発達理論は、内面が身体の衰えと切り離されて意味の転換を行うことを想定し、老いの克服への実践・応用を念頭に置いていたものと思われる。意味の転換によって人間の中で行われることは、本来の自己とは異なる世界への内面からの移行である。その意味で生涯発達理論における老いの克服への方法は、本来の自己があるべきところへ方向付けようとする「内なる自由」とは逆の方向を示す^{注20)}。

人間が「老いて」高齢者になるということは、時間の流れの中で現象するのである。生の文脈と無関係に、そして無時間性の世界で「老い」の不自由さを感じるのではない。身体が衰えてもなお人間としての能動的生を遂行するための原理が、

生涯スポーツの問題として語られねばならない。われわれは、客観的数値や心理的発達の上に老いを克服する希望をゆだねるのではなく、身体を基点とした世界構成から生きる希望を創造することにも克服の道を見いだすことができる。失われたものを取り戻すのではなく、さりとて体力（身体能力）を忘却ないし放置しつつ内面の変化に「老い」の克服を求めるのではなく、「主体の延長としての身体」から世界構成を行う能動性すなわち身体的自由の中に、「老い」の克服への一つの原理を見いだすことができる。

V 結 語

Sartre が指摘する身体の自由をめぐる問いは、キケロの著作の中で提起された体力不要論を徹底することでは解決できない問題である。なぜならば、いかに体力不要論によって精神生活を強調したところで、喪失された身体の自由性は喪失したまま放置され、あらたな自由性の獲得への道は閉ざされたままになるからである。精神面を充実させることによって老・荘年期（さらに厳密な言い方をすれば体力衰退期）における生の充実を図ることは確かに一つの有効な方法論でありうるけれども、ここでもまた生涯発達理論による「老い」の問題解決に限界があるのと同様ある種の限界が指摘できる。それが身体的実存の問題である。

本稿における以上の考察は、身体的「老い」の問題をひとまず実存のフィールドに呼び込むことになった。「老い」ということが人間の生涯という時間の流れの中で現象するというのであれば、身体的「老い」に関する実存の問題は人間存在と世界との関わり—それを端的に言えば世界内存在としての人間—の問題に行き着かざるを得ない。人間存在が世界内存在であるということは、自らが世界を構成しようということと世界内で出会いつつ生きることを意味している。このことからスポーツ実践とりわけ生涯スポーツ実践をめぐる問題もこの二つの問題をめぐって考察されてしかるべきである。ただしこの点についての詳細な考察は別の機会に譲らなければならない。

本稿における考察は加齢に伴って現象する身体 of 老いに関する自然科学的なアプローチをレビューすることから始められ、人間学の見地から人間の成長と内面の問題を考察し、老いの中に身体的実存を見出す結果となった。「老い」の問題はわれわれの生き方に関わる実存の問題である。本稿で意図したことは科学や発達理論の否定ではない。それらが有効である部分に加えて、それらのおよび得ない方向を示したかったのである。体育学の研究対象である実存問題としての「老い」は、これまでの考察で明らかなように、科学の客観でもなく純粋な心の領域でもない方向でありながら、微妙にそれらと関係せざるを得ない。それが身体的自由をめぐる問題なのである。

注

注1) いわゆる科学研究における主たる方法とみなされるであろう「実験」について、Weber (1919, S. 90) は次のように言っている。「さて、ギリシア人における概念の発見と並んで、ルネッサンスの産物としてあらわれた学問研究の第二の手段は、合理的実験であった。実験は経験を確証するための手段であり、これなしにはおそらくこんにちの経験科学は成立しえなかったであろう。一中略—では、学問はこれら近世初期の先駆者たちにとってなにを意味したであろうか。レオナルドのような芸術上の改革者たちにとっては、それは真の芸術に到達するための道を意味した。そして、この道はかれらにとって同時に自然の真相に到達するための道をも意味した。彼らにとっては、芸術は学問の位置にまで高められるべきものであり、芸術家は社会的にもまたその生活態度のうえからもドクトルの地位にまで高められるべきものであった」。Weber が芸術に関してさえも言及しているように、近代において当該領域が学として成立するためには合理的実験という方法が決定的な意味を持っていたのである。

注2) この人間的特殊性とはポルトマン (1981) による言葉である。その意味するところを彼は次のように言っている。「生物学研究は一つの面では、あらゆる生き物に共通する事象の中にますます深く進んでいって、遺伝機構の根本の構造にま

で達した。だがそれは他の面では私たちに、生きものにより体験にいろいろな差があることを示し、私たち人間が独自の特別の種であることをさらに印象深く知らしめた」。

注3) このような人間に特有な態度に対する科学の限界を Weber (1919, S. 94) は次のように言っている。「一般に自然科学は、もし人生を技術的に支配したいと思うならばわれわれはどうすべきであるのか、という問いにたいしてはわれわれに答えてくれる。しかし、そもそも技術的に支配されるべきかどうか、またそのことをわれわれが欲するかどうか、ということ、さらにまたそうすることがなにか特別の意義をもつかどうかということ、こうしたことについてはなんらの解決をも与えず、あるいはむしろこれをその当然の前提とするのである」。

注4) 人間の生と文化との関係について、Simmel (1918) は次のように言っている。「生 (Leben) がたんなる動物的なものを越え出て精神 (Geist) の段階に進み、そして精神がこんどは文化の段階にまで進むや否や、精神のなかに一つの内部的対立があらわれ、この対立の展開、和解、また新たな発生が文化の全道程を形作ることになる」。

注5) 佐藤 (1998) はスポーツを文化と捉える視座としての「スポーツ構造」について次のように言っている。「この『スポーツ構造』には、人間における身体的能力のみならず、すでに見たような知的能力、さらには美的、倫理的価値観にかかわるような感性的能力までもが疎外されていて、そこに独自の複合的構成体が形成されている」。

注6) 河野 (1997) は、この理由について次のように言っている。「なぜならば、生存には全く関係のない白球をめぐる真剣にプレイされる野球のような競い合いは、動物には存在しないと考えられるからである」。

注7) 西洋古典学者の久保 (1999) は、本稿で取り上げるキケロの作品について次のような評価をくだしている。「英語圏の数多い国々の高校や大学のラテン語授業において、幾十万、もしかしたら幾百万の若い男女にむかって「老い」について語り続けてきた。人生の門口に立って、初めて人生とはという問いを自分自身にむかって問

いかける若者たちに、人生とは一篇の戯曲にも似たるもの、と告げてきたのである」。

注8) なお、文献の中での発言は「大カトー」という登場人物によって語られるのだが、キケロは「大カトー」という登場人物に自分の思想を語らせる形でこの作品を書いている。したがって、本稿においては「大カトー」の言葉をキケロ自身の考えとして論を進めることにする。

注9) キケロ (1996, pp. 24-25) が仮定する老年の欠点は四つの点である。「さて、私の理解によると、老年が不幸なものと思われる理由は四つ見いだされる。第一に、老年は公の活動からわれわれを遠ざけるから。第二に、老年は肉体 (corpus, body) を弱くするから。第三に、老年はほとんどすべての快樂を奪い去るから。第四に、老年は死から遠く離れていないから」。キケロはこれら四つの欠点に対する反駁を試みるのである。なお、他の三つの欠点に関して考察を加えることは生涯スポーツを論じる上で重要であると思われるのだが、本稿においては体力論のみを考察の対象とする。他の諸点に関する考察は、より社会学的な展開として稿を改めて論じたい。

注10) 確かに、運動習慣や適切なトレーニングによってある程度この事実を回避したり衰える速度を緩やかにしたりすることは可能であろう。たとえば、「ゲートボールの実施は高齢女性の骨密度の現象を抑制させる効果があることから、低い運動強度の身体活動が高齢女性の骨折の予防に重要な役割を果たすことが示唆された」(宮元ほか, 1999) や、高齢者に対する比較的短期の介入的運動指導の実践が「抑うつ度の改善や筋力、平衡性、敏捷性といった体力要素と起居能力といった生活体力の一部の向上を引き起こし、部分的ではあるがQOLの改善に一定の有効性を有する可能性が示された」(浅井ほか, 2001) などの科学的知見は加齢による体力の衰えをカバーする方法を示している。だが人間存在が有限な生物学的存在である限り、それらの処置によってさえも完全に老いを免れることは不可能である。ここで重要なのは、人間存在に身体的老い、体力の衰えという現象が確実に現れるということである。

注11) Sartre (1943, p. 46) はこのことについて、

財布の中に千五百フランあると思っていたにもかかわらず千三百フランしかなかったという状況に直面したとき、人間は単純に千三百フランが入っている事実をそのまま受け取らずに二百フランの欠如を規準に状況把握をすることを次のように言っている。「私が千三百フランしか見いださないのは、私が千五百フラン見出すことを期待しているからである」。

注12) 矢野 (1995, pp. 37-56) は生涯発達という概念について次のように述べている。「生涯発達心理学は、その成人や老人をも対象に含め、乳幼児から老人までを含む生涯を一貫して、発達的にアプローチしようとする。このことの意味することは、生涯発達の考えによって発達は、必ずしも成長や成熟に平行する現象とは限らなくなり、成長や成熟の類義語ではなくなったということである。発達は成長、成熟を越えて、停滞（プラトー）や老化、衰退を含む生涯の過程となる」。

注13) やまだ (1995) は生涯発達を考えるモデルとして、「成長」「熟達」「成熟」「両行」「過程」「円環」の六つのモデルを提示している。両行モデルはそれらのうちの一つである。「両行」とは「対立物の共存と併行」や「両価値の共存」を意味し、多目的・多次元の発達が同時併行的にすすむことを強調するという点が両行モデルの基本的な意味である。さらに、やまだによれば、両行モデルにおいては何かを失うこと自体をプラスとマイナスの両価値でとらえ、喪失がプラスになることを積極的に想定するのだという。この点が「発達における喪失の意義を説くモデル」と見なすことの根拠である。ちなみにやまだは、この両行モデルが人間を研究する際に考えられる例を次のように挙げている。1) 「ない」という概念の形成と「なくなる」という認知、2) なくなり方の重要性、3) 行動や言語の消失過程への注目、4) 一貫性 (consistency) をもつ人間像から非一貫的な人間像へ、5) 記憶における忘却の意義、6) 愛着における喪失の意義、7) 停滞の意義、8) 何も「しない」ことの意義。ただしこれらはすべて人間の心理に関するパースペクティブであって、身体としての人間存在に関しては触れられていない。

注14) この意味の転換ということについてややニュ

アンスは異なるものの高橋・波多野 (1990) は次のように言っている。「生涯発達心理学のめざすところは、それぞれの個人にとって内的な意味のある変化として発達をとらえる視点の確立にある、といってよいかもしれない」。

注15) 科学は「存在するもの」を見出すのであり、「いかに存在すべきか」ということを探求するのではない。このような科学の働きをJaspers (1932) は哲学との対比において次のように言っている。「個別科学の目標は、世界定位 (Weltorientierung) における対象の認識であり、哲学することの目標は、世界現存在 (Weltdasein) の現象の中で単独者としての実存が自己自身を理解するということである」。

注16) 精神病理学者の中井 (1995, p. 185) は身体のような性格を「主体の延長としての身体」ととらえている。彼は次のように述べている。「たとえば解剖学・生理学的には横紋筋を動かす錐体路の自由性によって支えられている自由性であるといえ、医師にはわかりやすいだろう。運動麻痺において侵される身体である。『視ること』も『触れること』もこの身体である。老いはこの身体をさまざまに浸食する」。中井が指摘するように、老いによって浸食される身体は決して観念上の存在ではなく科学の対象となる実在である。よって、ここからも老いという事態の現実性が理解されるであろう。

注17) このような態度からは、「自由」の問題も必然的に実存の問題として自己の内面に現れてくるであろう。ちなみに関根 (1994) は、Lenk, H. のスポーツ哲学を論じる中で、スポーツにおける実存の問題について、「固有性」、「自由」、「超越性」の3点を抽出して論じている。

注18) 熊野 (1998) は、「不自由」とは異なる表現で老いてゆく身体の実存性を次のように語っている。「生は生に反して剥がれおちてゆく。生は生であるとともに、生が剥離してゆくことである。生はじぶんを維持しようとして、かえってみずからを失ってゆく。時間が時間であるとは、生のなかで生が剥がれおちてゆくことである。生が「忍耐」 (patience) であり、「老いること」 (vieillessement) が生にとって必然的である、とはそういうことだ」。この意味でも、われわれが「老いる」ということは生物学的存在として必然

的な事柄にとどまるものではない。老いるということは、人間存在にとって明らかに実存的次元で受け止められる事柄であるといえる。

注19) 幻影肢の意味について木田（1984）は、「幻影肢というのは、戦傷や交通事故などで手足の切断手術を受けた人が、たとえばすでにないはずの右足に生ま生ましい痛みやかゆみを感じたりするような病的現象である」と解説している。Merleau-Ponty（1945, pp. 96-97）によれば、この幻影肢は「生理的なもの」と「心的なもの」という二分法的分析では説明がつかないという。むしろ、「以上の現象は、生理学的説明によっても心理学的説明によっても等しく歪められてしまうものだが、これとは逆に、世界内存在という展望の中ではじめて了解のつくものなのである」。このように、幻影肢という現象は人間存在の世界に向けた実存の運動という事態に密接に結びついているのである。

注20) 「老い」を契機としてプレイよりも仲間とのつながりに喜びを見いだすこと自体は、人間にとって重要なことであろう。だが、そのことの価値は別として、意味の転換を進めることはプレイそのもの、スポーツそのものから離れることである。スポーツを行う限り、たとえ体力が衰えたとしてもプレイそのものに喜びを見いだそうとする態度こそが、スポーツを行う人間の「本来の自己」であろう。

文 献

- 青木邦夫（1994）高齢者の自覚的健康度に関連する要因。体育学研究, 38：375-386。
- 青木邦夫（2000）健康指導教室参加高齢者の精神的健康の変化に関連する要因。体育学研究, 45：1-14。
- 浅井栄典・新開省二・井門恵理子（2001）虚弱高齢者のQOLに対する短期間の定期的な運動指導の有効性。体育学研究, 46：269-279。
- ボーボワール：朝吹三吉訳（1972）老い。人文書院：京都, p. 15。
- キケロ：中務哲郎訳（1999）大カトー・老年について。岩波書店：東京。＜Cicero, M.T. (1996) Cato Maior De Senectute (12s.). Loeb Classical Library. Translated by W.A. Falconer. Harvard University Press: London.＞
- Grupe, O. (1987) Sport als Kultur. Interfrom：Zürich, S. 9.＜グルーベ：永島惇正・岡出美則・市場俊之訳（1997）文化としてのスポーツ。ベースボール・マガジン社：東京＞
- Jaspers, K. (1932) Philosophie I. Philosophische Weltorientierung (1973, 4. Aufl.). Springer: Berlin, S. 321.＜ヤスパース：武藤光朗訳（1964）哲学I：哲学的世界定位。創文社：東京。＞
- 金子晴勇（1995）人間学とはいかなる学問か。金子晴勇編 人間学—その歴史と射程。創文社：東京, pp. 1-8。
- 金崎良三（2000）生涯スポーツの理論。不昧堂出版：東京。
- 勝田 茂（2002）体力からみて高齢者にふさわしいスポーツ。体育の科学, 52：763-768。
- 木田 元（1984）メルロ＝ポンティの思想。岩波書店：東京, p. 120。
- 衣笠 隆・長崎 浩・伊東 元・橋詰 謙・古名丈人（1995）腰痛経験に及ぼす体力と加齢の影響：特別養護老人ホームの女性介護職員の場合。体育学研究, 40：151-160。
- 久保正彰（1999）高齢化社会とキケロー。図書, 600：36-38。
- 河野清司（1997）象徴形式としてのスポーツの構造論的研究：その生成、機能、発展を中心にして。体育学研究, 42：128-141。
- 熊野純彦（1998）移ろいゆくものへの視線（上）—レヴィナスにおけるもうひとつの＜時間＞をめぐって—。思想, 9：4-30。
- レーヴェルス：尾田幸雄訳（1976）心理学における身体の問題。藤田健治他訳：現代の哲学的人間学。白水社：東京, pp. 156-169。
- Merleau-Ponty, M. (1945) Phénoménologie de la perception. Gallimard: Paris.＜メルロ＝ポンティ：竹内芳郎・小木貞孝訳（1967）知覚の現象学。みすず書房：東京。＞
- 宮元章次・石河利寛・北村虎雄・押川紘一郎（1999）ゲートボールの実施が高齢女性の骨密度に及ぼす影響。体育学研究, 44：493-499。
- 中井久夫（1995）家族の深淵。みすず書房：東京, p. 185。
- 中谷敏昭・難本雅一・三村寛一・伊藤 稔（2002）日本人高齢者の下肢筋力を簡便に評価する30秒椅子立ち上がりテストの妥当性。体育学研究, 47：

- 439-450.
- 荻野恒一 (1988) 現象学と精神科学. 世界書院: 東京, p. 101.
- ポルトマン: 八杉龍一訳 (1981) 生物学から人間学へ. 思索社: 東京, pp. 293-294.
- 佐藤臣彦 (1992) 体育とスポーツの概念的区分に関するカテゴリー論的考察. 体育原理研究, 22: 1-12.
- 佐藤臣彦 (1998) 人間存在における身体の特異性—体育哲学およびスポーツ哲学からの考察—. 身体運動文化研究, 5: 31-47.
- Sartre, J.P. (1943) *L'être et le néant*. Gallimard: Paris, p. 46. <サルトル: 松浪信三郎訳 (1999) 存在と無. 人文書院: 京都. >
- Scheler, M. (1949) *Die Stellung des Menschen im Kosmos*. Nymphenburger Verlagshandlung: München, S. 12. <シェーラー: 亀井 裕・山本 達訳 (1977) 宇宙における人間の地位. 白水社: 東京. >
- 重松良祐・中村容一・中垣内真樹・金憲経・田中喜代次 (2000) 高齢男性の日常生活に必要な身体機能を評価するテストバッテリーの作成. 体育学研究, 45: 225-238.
- Simmel, G. (1918) *Der Konflikt der modernen Kultur* (1999). In: Rammstedt, O. (Hg.) *Georg Simmel Gesamtausgabe*. Band 16. Suhrkamp: Frankfurt am Main, S. 181. <ジンメル: 生松敬三訳 (1994) 現代文化の葛藤. 白水社: 東京. >
- 鈴木晶子 (1997) 「発達」の行方. 現代思想, 25: 264-273.
- 関根正美 (1994) ハンス・レンクのスポーツ哲学における実存の問題. 体育・スポーツ哲学研究, 16: 41-51.
- 高橋恵子・波多野誼余夫 (1990) 生涯発達の心理学. 岩波書店: 東京, p. 12.
- 安永明智・谷口幸一・徳永幹雄 (2002) 高齢者の主観的幸福感に及ぼす運動習慣の影響. 体育学研究, 47: 173-183.
- やまだようこ (1995) 生涯発達をとらえるモデル. 無藤 隆ほか編 生涯発達心理学とは何か. 金子書房: 東京, pp. 57-92.
- 山口順子 (2003) 身体の解放と自由: 変化する身体への目線. 体育・スポーツ哲学研究, 25: 1-11.
- 矢野喜夫 (1995) 発達概念の再検討. 無藤 隆ほか編 生涯発達心理学とは何か. 金子書房: 東京, pp. 37-56.
- Weber, M. (1919) *Wissenschaft als Beruf* (1992). In: Baier, H., et al. (Hg.) *Max Weber Gesamtausgabe*. Band 17. J.C.B. Mohr (Paul Siebeck): Tübingen. <ヴェーバー: 尾高邦雄訳 (1980) 職業としての学問. 岩波書店: 東京. >

(平成15年6月6日受付)
(平成17年3月22日受理)